

核兵器が守らなかったもの

海野 遥香

「核兵器は地球を守れるか？」この問いに対して1年前の私であれば迷いながらも「守れる」と答えていただろう。そもそも私の核兵器に対する興味は薄く、核兵器がもう一度どこかに落とされる可能性についても真剣には考えていなかったうえ、何十年前前に自分の国に落ちた核兵器がもたらした被害についても教科書に書いてある情報、すなわち「8月6日に広島に核兵器が使用されて約14万人がなくなり、8月9日に長崎に同じく核兵器が使用されて約7万人がなくなった」ということくらいしか意識していなかった。当然、大勢の民間人がたった2発の爆弾によってなくなり、それ以降も放射線を原因とする様々な症状に苦しんでいることに対して憤りを覚えてはいたが、核兵器はあくまでも過去のことであった。そのため、使用されてから第二次世界大戦は終わり、「核抑止力」という言葉があるように核兵器を各国が保有していることによって、冷戦はあったが第三次世界大戦と呼ばれる戦いも現在まで起こっていない。また、核保有国であるアメリカの存在によって日本の平和が保たれている側面があると認識していたからだ。

しかし、長崎の原爆資料館を訪れた際に、私の考えは大きく変わった。前述したように、原爆の被害について詳しく知らなかった私にとって、展示されていた写真や物はもちろん被爆者の生の声や絵画は衝撃的という言葉に尽きた。それまで私にとって数字でしかなかった「広島、長崎に投下された原爆による死者数約21万人」がリアルな重みを持った瞬間であった。78年前ここに本当に原子力爆弾が落ち、自分と同じように明日が来ることを信じて生きていた一人一人が一瞬にして亡くなったのだ。恐ろしくなった。あまりにも多すぎる犠牲が、被爆者やその家族や友人の深い悲しみが、今まで同じ日本という国に住みながらそれを知らずに生きていた自分のことが、またどこかに核兵器が落ちるかもしれないということが、そしてこれほどまでの被害を出した場所に今自分が立っていることが。

この漠然とした恐怖をもとに今年は核兵器に関する大学の講義を受けた。その講義の中で、さらに多くの広島及び長崎の被爆者の話に触れた。綺麗な夕焼けも原爆投下時の空を思い出してしまうという被爆者の話が忘れられない。毎日毎日自分も周りも深く傷ついた日のことを思い出すのはどれほど苦しくまた切ないことだろうか。そして、核兵器＝広島・長崎に落とされたもの、という意識のもと今まで知ることの無かった、各国の核兵器実験による被爆者や故郷を追われた人々、ウラン採掘場で働く人々の話も学んだ。唯一の被爆国日本という言葉はよく使われ、その結果日本人は核兵器の被害は第二次世界大戦頃の過去の話だと認識しがちであるが、核兵器による被害に苦しむ人々は今もたくさんいる。

「核兵器は地球を守れるか」今の私なら「守れない」と答える。核兵器はかつて地球に存

在する多くの命を奪い、生活を奪った。そして今も、核兵器を脅しとして使いながらウクライナ侵攻が行われている。間接的に多くの市民の命や穏やかな生活が核兵器によって奪われているのである。この兵器がどうして地球を守っていると言えるのだろうか。

平和のためという理由で持つには核兵器の力は大きすぎる。特に現代の核兵器は長崎に落とされた核兵器の数倍から数十倍の威力を持つそうだ。単純に考えても数十から数百万人の人々をはじめ動植物の命を一瞬で破壊できるこの兵器が使用されるときのことを考えないわけにはいかない。また、私が長崎という地に立った時に感じた恐ろしさには未知のものへの恐ろしさもある。チェルノブイリ原発周辺地域で様々な生き物の遺伝子異常が発見されていることを思い出したからだ。長崎は多くの人々が住んでいる町だとは言え本当に何の影響もないのか、不安になったのだ。私たちは私たちが感じている不安を少しでも未来の世代に感じさせないようにしていくべきだ。ではどうしたら「地球を守れる」のか。核兵器を無くせば地球を守れるのか。残念ながら、そう簡単なものではないだろう。終末時計が残り 90 秒である理由は核兵器だけではない。気候変動や感染症の感染拡大による社会の機能停止など様々な問題が国際的な規模で発生している。そんな国際的な危機が広がる中、核兵器が地球を守る手段と言えらば、少しずつ減っていくことで危機的状況を少しでも改善することだろう。

原子力爆弾の真の恐ろしさを私たちに伝えるのは何であろう。それは教科書に書かれた数字でも科学的な説明でもなく、被害者の体験談であり、実際に原爆が落ちた地に立つことだ。それを知った今の私には「核兵器は地球を守れる」と答えることはできない。